

皆さん、おはようございます。今日は「葉っぱのフレディ」 - いのちの旅 - という絵本のお話をしたいと思います。(レオ・バスカーリア作、みらい なな訳 童話屋 1998.10/22初版発行)

春になって「葉っぱのフレディ」は生まれました。数え切れないほどの葉っぱに取り囲まれ、どんどん大きくなって行きました。初めフレディは、どの葉っぱも自分と同じ形をしていると思っていましたが、やがて、一つとして同じ葉っぱはないことに気がつきました。フレディには友達が沢山いました。隣のアルフレッド、右側のベン、すぐ上のクレア。でも一番の親友はダニエルです。ダニエルは、ほかの葉っぱよりも大きくて、考えることが大好きで、フレディに、いろいろなことを教えてくれました。フレディたちが木の葉っぱであること、また、フレディたちの下は公園であることなど、いろいろ教えてくれました。

夏になって、青々と茂ったフレディたちは、とても元気です。お日様は早く昇って遅く沈むので、沢山遊べます。かんかん照りの暑さは、なんて気持ちがいいのでしょうか。ある日、公園に、木陰を求めて、大勢の人がやってきました。ダニエルは立ち上がり「さあ体を寄せてみんなでかげを作ろう」と呼びかけました。フレディはダニエルに尋ねました。「どうしてそんなことをするの？」。するとダニエルは言いました。「暑さから逃げ出してきた人間に、涼しい木陰を作ってあげると、みんな喜ぶんだよ」。ダニエルの言った通りでした。木陰に、おじいさんやおばあさんが集まって来ました。子供たちも来ました。お弁当を広げる人たちもいます。フレディたちは、葉っぱをそよがせて涼しい風を送ってあげました。「フレディ、これも葉っぱの仕事なんだよ」。ダニエルの話を聞いて、フレディはうれしくなりました。

でも、楽しい夏は駆け足で通り過ぎて行きました。たちまち秋になり、十月の終わりのある晩、突然寒さがおそって来ました。フレディも、仲間のアルフレッドも、ベンもクレアも、ぶるぶるふるえました。みんなの顔に、白く冷たい粉のようなものがつきました。朝になると、白い粉は溶けて、雫がキラキラ光りました。「霜がきたのだ」とダニエルが言いました。もうすぐ冬になる知らせだそうです。

緑色だった葉っぱたちは、一気に紅葉しました。公園は丸ごと虹になったような、美しさです。アルフレッドは、濃い黄色に、ベンは明るい黄色に、クレアは燃えるような赤、ダニエルは深い紫色に、そしてフレディは、赤と青と金色の三色に変わりました。なんてみごとなのでしょう。

一緒に生まれた、同じ木の、同じ枝の、どれも同じ葉っぱなのに、どうして違う色になるのか、フレディには不思議でした。「それはね - 」とダニエルが言いました。「生まれた時は同じ色でも、いる場所が違えば、太陽に向く角度が違う。風の通り具合も違う。月の光、星明かり、一日の気温、何一つ同じ経験はないんだ。だから紅葉するときは、みんな違う色に変わってしまうのさ」。

ある日、強い風が襲いかかって来ました。葉っぱはこらえきれずに吹き飛ばされ、次々と落ちて行きました。「さむいよう」「こわいよう」葉っぱたちはおびえました。そこへ、風のうなり声の中からダニエルの声が聞こえて来ました。「みんな引越しをする時が来たんだよ。とうとう冬が来たんだ。僕たちは、ひとり残らず、ここからいなくなるんだ」。

フレディは悲しくなりました。「ボクもここからいなくなるの？」「そうだよ。ボクたち

は葉っぱに生まれて、葉っぱの仕事を全部やった。太陽や月から光をもらい、雨や風に励まされて、木のためにも、他人（ひと）のためにも立派に役割を果たしたのさ。だから、引っ越すのだよ」とダニエルは答えました。「ダニエル、君も引っ越すの？」とフレディは尋ねました。「ボクも引っ越すよ」「それはいつ？」「ボクの番が来たらね」「ボクはいやだ！ボクはここにいるよ！」とフレディは大声で叫びました。アルフレッドもベンもクレアも、「そのとき」が来て、引っ越して行きました。見ていると風に逆らって、枝にしがみつ葉もあるし、あっさり離れていく葉っぱもあります。やがて木は葉っぱを落として裸同然になりました。残っているのは、フレディとダニエルだけです。「引っ越しをするとか、ここからいなくなるとか、君は言ってたけれど、それは...」とフレディは胸がいっぱいになりました。「死ぬ、ということでしょうか？」。ダニエルは口を堅く結んでいます。「僕死ぬのがこわいよ」とフレディが言いました。「その通りだね」とダニエルが答えました。「まだ経験したことがないことは、こわいと思うものだ。でも考えてごらん。世界は変化し続けているんだ。変化しないものは一つもないんだよ。春が来て、夏になり、秋になる。葉っぱは緑から紅葉して散る。変化するって自然なことなんだ。君は春が夏になるとき怖かったかい？緑から紅葉するとき怖くなかったろう？僕たちも変化し続けているんだ。死ぬというの、変わる一つのなんだよ。」

「変化するって自然なこと」だと聞いて、フレディは少し安心しました。「ねえダニエル、僕は生まれて来てよかったのだろうか」とフレディは尋ねました。ダニエルは深くうなずきました。「僕らは、春から冬までの間、本当によく働いたし、よく遊んだりもした。人間に木陰を作ったり、秋には紅葉してみんなの目を楽しませたりもした。楽しかったろう。幸せだったろう。」

その日の夕暮れ、金色の光の中をダニエルは枝を離れて行きました。「さよなら、フレディ」。ダニエルは満足そうな微笑みを浮かべ、ゆっくり静かにいなくなりました。このあと、フレディも初雪が降った翌日、静かに枝を離れて行きました。痛くもこわくもありませんでした。空中にしばらく舞って、それからそっと地面に降りて行きました。その時、はじめてフレディは、木の全体の姿を見ました。がっしりした、たくましい木。これならいつまでも生き続けるに違いありません。フレディはダニエルから聞いた「いのち」という言葉を思い出しました。「いのち」というのは、永遠に生きているのだ、ということでした。そして、フレディは雪の上で目を閉じ、静かにねむりに入る訳ですが、いかがですか「葉っぱのフレディ」のお話。私たちの人生も、この「葉っぱのフレディ」と同じようなものではないでしょうか。大自然の移り変わりの中で、すべてのものが移り変わっていく。仏教の言葉では「諸行無常」と言いますが、キリスト教では「神の摂理」と言います。私たちもまた移り変わっていく。神様から命を与えられ、なすべき事をなし、その働きを終えた時、再び私たちは神様のみもとに帰っていくのであります。

この絵本の最後は、こんな言葉で終わっています。

フレディは知らなかったのですが -

冬が終わると春が来て、雪はとけ水になり、枯れ葉のフレディは、その水にまじり、土に溶け込んで、木を育てる力になるのです。

「いのち」は土や根や木の中の、目には見えないところで、新しい葉っぱを生み出そうと準備をしています。大自然の設計図は、寸分の狂いもなく「いのち」を変化させ続けているのです。

また春がめぐって来ました。